まえがき

本書は、都市東京の現在を読み解き、未来を考えるためのガイド、そしてそのための素材を収めたカタログとして、執筆された。

私たち一人ひとりが暮らす「世界-環境」は今日、大きな変化に直面している。グローバル化、デジタル化、地球環境問題、そしてパンデミック。社会はいまどこに向かっているのか。簡単に答えを出せるわけではもちろんない。そもそも、このような大きな問いに誰が答えていくのか。そのこと自体が改めて問われ直しているのが現在だ、と言えるかもしれない。

「都市に聴け」

この本ではとりあえず、都市、そしてより具体的には東京から、問いに答える作業を始めてみることにしたい。東京は理想の都市ではない。また、明るい未来を体現する都市とも言えない。だが、東京の経験そして現在にも学ぶべき点は少なくない。街から聞こえる多様な声に耳を傾け、また展開する微細な風景に目を凝らすこと。細々と作業を始めてからすでに一〇年近い歳月が経った。本書に載せられた多くの写真はその間の記録でもある。

もちろん、次のような指摘もありうるだろう。今後到来する新しい「世界-環境」をはたして「都市」と表現してしまってよいのか。この点はそれ自体、検討課題として私たちの前にある。だが、集

住環境として数千年の歴史をもつ都市は意外にしぶとい。都市の生成をめぐって生み出されたモノと知は、時間と空間の壁を自在に越えてきた。それゆえ都市をめぐる思索としてのアーバン・スタディーズも、都市自体の越境性に導かれながら、新しい挑戦へと足を踏み出すことをつねに求められてきた。本書はこれらの成果から学んでいる。そのため、アーバン・スタディーズへの招待としても読めるように、本書では、空間、時間、経済、政治、文化、社会という幅広い視点を東京に即してカバーすることをめざした。

都市の全体性に迫ろうとする試みは、しばしば網羅性や一般性に振り回されて陳腐な作業に終わってしまうことがある。そのせいか、印象深い歴史やエピソードから東京を論じる著作は多いものの、分野の広がりを丹念にカバーした作品は意外と少ない。筆者は本書において、このやっかいな課題にあえて取り組むこととした。ただし本書自体は、関心のある章から読んでいただくことも可能なつくりとなっている。入り口はどこでもかまわない。そのうえで、たとえば空間と政治、文化と経済といった一見異なる切り口が、実は都市の無数の出来事を介して密接に結び合っていることについて、少しでも感じとっていただければと、願っている。

刊行の機会が近づいてきたとき、東京を含め世界の都市では、思いがけない光景が展開することとなった。本書は新しい変化に十分対応できているわけではない。だが長い歴史が教えてくれているように、社会は積み重ねを通じてしか変わらない。新しい未来をつくる際も、私たちはいま目の前にある都市を使いこなしていくしかない。変化へ対応するための道具箱の中身は急に変わるわけではない。

よくみると使えるものはたくさんある。新しい一歩を踏み出すための道具箱の中身を確認していく作業に本書が少しでも役立つことがあれば、筆者としてこれに勝る喜びはない。

以下は、基本的に書き下ろしの形で発表される。ただし筆者の過去の仕事に依拠した部分があり、また全体のまとめ方についてもいくつかの段階を経てきた。この間、多くのご助言やサポートをいただいた研究者、調査協力者、編集者の皆様に改めて御礼を申し上げます。最終段階の草稿の一部は、一橋大学大学院社会学研究科における演習でも紹介をさせていただく機会を得た。コメントを下さった受講者の皆様に感謝を申し上げます。思い起こすと、筆者が本書の内容に取り組むようになったきっかけは二〇年前に西澤晃彦さんとの共著により同じ有斐閣から刊行いただいた『都市の社会学』にあった。きびしい状況のなか、このような発表の機会を再びご提供くださり、また細部に至るまで丁寧に編集をご担当いただいた有斐閣書籍編集第二部の松井智恵子さんに、心から感謝を申し上げます。

二〇二〇年一一月

町村敬志

目次

CONTENTS

まえがき　i

第1章　東京から考える　●アーバン・スタディーズという冒険　ヒト・モノ・ココロ　001

1　都市と出会うということ　002
あなたは「東京」とどう出会ったか▼002
いま、都市を考えるということ▼003
アーバン・スタディーズという視点▼005

2　歴史のなかのアーバン・スタディーズ　006
「都市」問題の発見▼006
「実験室」としてのモダン都市▼009
都市建設の実践知▼012

3 転換する都市 …… 014
アーバン・スタディーズの登場▼014　再編される都市にどう迫るか――ハーヴェイから
サッセンへ▼016　遅れていく都市▼019

4 都市のアクチュアリティに迫る――文学から学ぶヒト・モノ・ココロの語り方 …… 021
啄木と朔太郎▼022　白秋と開高▼025　「膨張力なき時代」の膨張とは▼027

5 もう一度、アーバン・スタディーズへ …… 028
都市とは、空間への社会の投影である▼028　ヒト−モノ−ココロの連接としての都市▼030
アーバン・スタディーズの三つのタイプ▼032　「日常性の構造」としての都市▼036
日常性の潜勢力――編み直される出来事・情況・構造▼039

6 「変わる／変わらない」ための道具箱をめざして――本書の立ち位置 …… 042
未来に立ち向かうための道具箱としての都市▼042　三つの自由から都市を考える▼043

第2章 だらだら広がる都市の秘密 ●東京はいかにして東京になったのか 歴史 047

1 グレーター東京の成り立ちを探る …… 048
とめどなく続くあいまいな広がり▼048　なぜ東京はメガシティとなったのか▼049
つくられる東京▼051

2 「だらだら続く」をもたらした仕掛け …… 053
ツインシティの誕生――「東京」と「横浜」▼054　生き残る鉄道▼055　地図上で見つかる不連続な空間▼060　「平和の遺産」としての郊外▼062　分不相応な巨大都市――使いこなし、使い尽くされた条件▼066

3 駅前から始まる「東京」 …… 067
郊外へ、郊外へ▼067　「駅前」という擬似世界▼068　「コミュニティ」――擬制としての共同体▼070　「駅前」を通じた統合と序列化▼072　都市計画の「失敗」？▼074

4 広がりの「出来事」史 …… 076
あいまいな「東京」を生きる▼076　広げられる「東京」の外縁▼076　埋立地の「抵抗」、

郊外の「反乱」▼081　しみ出す「東京」▼084　鉄道の郊外と自動車の郊外▼085

5　ポスト「郊外」の行方 …… 087

「廃棄された生」の置き場を超えて▼087　サバービアの新しい可能性――人新世の郊外化論？▼089　誰が「広がり」を論じるのか▼091

第3章　都市はメガイベントで輝いたのか　●出来事から考える　イベント　095

1　問いとしてのオリンピック …… 096

オリンピックの「大きさ」を疑う▼096　都市はいつオリンピックをめざすのか？▼098　「二割国型」オリンピックとしての一九六四年大会▼100　「小さな」イベントになっていた二〇二〇年大会▼101　問い直される「二〇二〇大会」▼103

2　一九六四年のオリンピック空間を再考する …… 104

オリンピック開催の空間的インパクト▼104　東京西部に偏るオリンピック関連施設▼104　解放された都市空間▼106　「軍都」「皇都」からの解放▼106　オリンピックの隠れたストーリー▼112

3 積み重なる東京の空間をどう理解するか …… 112

東京オリンピックという「偶然」▼113　「出来事」と「構造」がつくる都市▼114

東京を構造から理解する▼115　山の手と下町▼117

4 オリンピックの都市的効用 …… 118

忘れられたオリンピック空間▼118　レガシーとしての代々木公園▼119　「政治の季節」の公共空間として▼122　「族たち」のメッカ――開かれた「空間」の効用▼124

5 メガイベントではなくスモールイベントとして …… 127

「なくてもよい」イベントとしてのオリンピック▼127　メガイベントからスモールイベントへ▼128　メガの時代の後に▼130

第4章 一極集中のオモテとウラ ●産業・仕事・格差　経済・階層 …… 133

1 その後の「世界都市」 …… 134

混迷する世界都市▼135　世界都市の皮肉――サッセンはどこで間違えたのか▼137

グローバルシティの「その後」を考えるために▼140

2 東京の「仕事」はどこにあるのか……142

東京・産業の半世紀▼142　東京の「半分」が働く現場▼147　「その他」化する産業▼149
境界架橋型のコンビニエンス都市へ▼151

3 いまそこにある格差のかたち……152

超高層ビルのなかの分断された世界▼152　東京の経済世界、その見取り図を描く▼154
正規・非正規を分ける壁――労働条件からみた四つの類型▼158　重層化する格差の構造▼162
消費される「格差」言説▼165

4 それでも場所は重要である……166

都市は経済成長のエンジンなのか▼166　インターフェイスとしての場所▼169
つくられる場所、生まれる場所▼170　小さな場所を絶えずつくりだしていく▼177

第5章 奪われる東京 ●「空間争い」の時代に 空間 179

1 都市は場所をつくり続けることができるのか …… 180
まだら模様になる都市▼180　空間争いを「ユーザーサイド」から見つめ直す▼181
家族・学校・会社のすき間を埋める▼189

2 タワー都市のつくり方、つくられ方 …… 192
なぜアジアはタワー好きなのか▼192　高くはなかった東京▼196　「建てずに済ませていた東京」はどのように奪われたのか▼204　金融ポートフォリオ化する都市▼209

3 格差社会において空間をどう配分し直すか …… 211
空間化する格差の時代に▼211　いまある都市空間はいつ建造されたか▼212　寡占化されていく都心に責任をもつのは誰か▼216

4 都市を「可能性の空間」とするために …… 218
ポートフォリオ志向の都市化に歯止めをかける▼218　「小さな場所」の連なりをつくりだす▼220　使えるものは何でも使う、しかし知恵と節度をもって▼222　プラグを抜かれ

ても耐えられる都市へ▼225

5　積み重ねでしか、都市は生まれない……226

第6章　「東京政治」の溶解と再生　●責任ある知事がなぜ現れなかったのか　政治　231

1　都市を未来のために「使える」場とするために……232

豊洲への築地市場移転をめぐって――決定の形（その1）▼233　オリンピック・パラリンピックの場合――決定の形（その2）▼238

2　見える政治、見えない政治……246

なぜ超高層化が進んだのか――決定の形（その3）▼247　新自由主義的な「改革」政治――決定の形（その4）▼252

3　大都市にすり寄る国家、国家に依存する大都市……258

規模・スケール・民主主義▼258　都市は世界を変えられるのか▼263　一国主義台頭下のグローバルシティ――新しい役割への挑戦か、それとも孤立か▼265

4 新しい都市の政治へ ——アセンブリとしての都市 …… 267

格差社会における支援と自立 —— 決定の形（その5）▼268　パブリックスペース —— 都市政治を支える民主的なインフラとして▼269　グローバリゼーションを手なずけるために▼276

第7章 都市に出来事を取り戻す ●社会が再び動き出す都市へ　出来事へ 279

1 都市の時代は終わったのか …… 280

「集まろうぜ。」のパラドックス▼280　「集まる」ってどんなことだったのか？▼282

2 集まりの条件を考える …… 285

「出来事」生成のために必要なもの▼285　ふつうの都市を使いこなすために —— 半公半私の中間的領域から始める▼288　どこにでもある商店街が大切な訳▼290　自生的「配慮」を生み出す仕掛け —— 接触領域を豊かにするために▼294

3 市場化する都市に社会を再貫入させるために …… 296

市場化する都市空間▼296　市場に社会を再貫入させる▼297　所有の形を重層化する▼

300
4 人が変えていく都市 …… 303
変わらない都市、それでも意外に変わる都市▼303　モノとヒトの交差するところ――食の媒介力から考える▼306　コンタクト・ゾーンとしてのエスニック飲食店▼307
5 ミニマムな共同性の基盤としての都市 …… 312
都市を使いこなす知恵▼312　小さな出来事のモザイクとしての都市▼313　都市は誰のものか▼314
参考文献　317
索引　巻末

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

第3章

都市はメガイベントで輝いたのか

●出来事から考える

1 問いとしてのオリンピック

❖ オリンピックの「大きさ」を疑う

二〇二〇年に予定されていたオリンピック・パラリンピック開催を控えた二〇一〇年代後半、東京では関連のポスターや広告が目につくようになっていた。

五年後、さすがＪＡＰＡＮ！って言われたいよね。（二〇一五年、電車中づり広告、保険）

東京オリンピックは、もう始まっている。（二〇一六年、新聞広告、証券）

ライバルは、一九六四年。（二〇一七年、電車中づり広告、ＡＣジャパン）

オリンピックはわずか二週間あまりのスポーツイベントにすぎない。パラリンピックを含めても数週間で終わる。大規模とは言っても、始まればあっという間に終わってしまう。まさに「出来事」である。しかし、何年も前から、人びとは「もう始まっている」と背中を押

電車内のつり広告風景
（東京都内，2017年２月）

される。実際のオリンピックは大半の人にとって自身と無縁な存在にすぎない。だが、身に覚えもない一九六四年まで「ライバル」として引き合いに出されて、「さすがＪＡＰＡＮ！」に向けたがんばりを要請される。

大きいのか、小さいのか。オリンピックは不思議なイベントである。

結論から先に言うと、メガイベントが都市に及ぼす影響は過大に見ない方がよい。たとえば一九六四年大会は戦後東京の一大エポックとして語られてきた。それは間違いではない。だが、オリンピックと結びつけて論じられることの多い新幹線や高速道路などは、仮に大会がなくとも遅かれ早かれ姿を現したにちがいない。その意味で、オリンピックがいまの東京をつくったわけではない。だが、二週間ほどの興奮を経験すると、人はとたんにそれまでのことを忘れてしまう。メガイベントは人の記憶を偽装する。

パンデミックという突然の事態によって、都市とオリンピックには新しい歴史が付け加わった。開催の有無にかかわらず、オリンピックという出来事は都市に独特の影響を及ぼす。それはいったいどのような形か。また、どのような回路を経てか。

この章は、メガイベントとしてのオリンピックを事例として取り上げながら、都市をつくりあげる「出来事」の意味とその影響について考える。

✣ 都市はいつオリンピックをめざすのか?

初めに、オリンピックを歴史的な視点から改めて考え直してみよう（図1参照）。

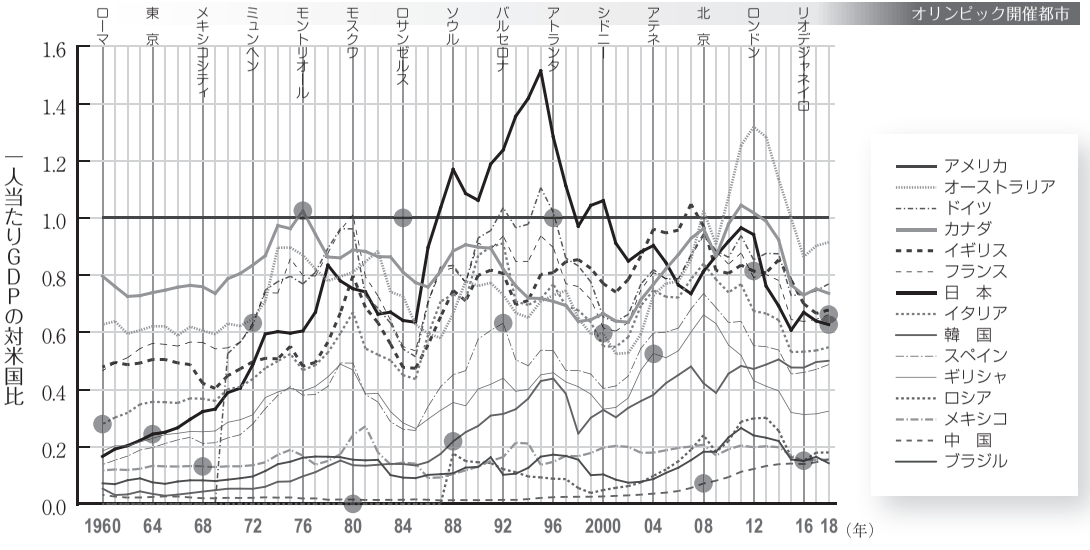
オリンピックは都市が開催するイベントである。しかしその巨大さゆえに、開催には多額の費用や長期にわたる準備が必要となる。そんなオリンピックをなぜ世界の都市は開催しようとするのか。このグラフは、オリンピック（冬季は除く）を開催した都市が所在する国が、大会開催の時点で、どのような経済発展の段階にあったのかを示している。

具体的には、一九六〇年のローマ大会以降についてオリンピック（冬季は除く）を開催した国を取り上げ、各国の人口一人当たりGDP（国内総生産）の推移を表した。図示にあたっては、各年について、同年のアメリカの人口一人当たりGDPを一としたときの比率として、各国の値を算出し示している。また各国でオリンピックが開催された年がわかるように、グラフ上に大きなマークで示した。アメリカは第二次世界大戦後、世界の「豊かさ」の象徴であった。それゆえ、オリンピック開催の時点で、各国が相対的にみてどのような経済水準にあったのかを、このグラフは大まかではあるが示している。

グラフを見ると、興味深いことに気がつく。すなわち、オリンピックを開催した時点の経済水準をみると、そこには大きく分けて三つのタイプがある。

第一は、人口一人当たりGDPが対米国比でおよそ二割前後のときに、オリンピックを開催する

図1 ● オリンピック開催国の1人当たりGDP（currentUS $）の対米国比の推移：1960～2018年



（注） アメリカの1人当たりGDPを1としたときの割合。割合が0は，GDPデータが得られないことを示す。●マークは夏季オリンピック開催年。ただし，東京2020大会およびパリ2024大会については2018年に●マークしている。

（出所） The World Bank, *World Development Indicators*, 2019により筆者が作成。

ケースである。一九六〇年ローマ、六四年東京、六八年メキシコシティ、八〇年モスクワ、八八年ソウル、二〇〇八年北京、一六年リオデジャネイロなどがそれで、このタイプは二〇世紀後半以降のオリンピックの基本形をなす。

第二に、人口一人当たりGDPが対米比で約六割前後のときに開催されるケースである。一九七二年ミュンヘン、九二年バルセロナ、二〇〇〇年シドニー、二〇〇四年アテネなどがこれにあたる。

第三に、同じく約一〇割、すなわちアメリカに匹敵する経済水準をもつ国で開催されるケースがある。アメリカ本国で開催された八四年ロサンゼルス、九六年アトランタのほか、七六年モントリオール、二〇一二年ロンドン（九割程度ではあるが）などをここに含めてよいだろう。

これらを順に二割国型、六割国型、一〇割国型のオリンピックと呼んでおこう（町村 二〇〇七）。

❖「二割国型」オリンピックとしての一九六四年大会

二割国型とは、新興国による国威発揚型のオリンピックであった。発揚の先は国外だけではない。むしろどこでも国内の民衆に向け「成功」をアピールするねらいがあった。開催都市が、リオデジャネイロを除きすべて首都であったのは、その意味で偶然ではない。

これと比べると、六割国型と一〇割国型はだいぶ様相が異なる。六割国型には、一定の経済発展を遂げた連邦的国家の二番手都市などが含まれる。また一〇割国型の場合には、先進国の大都市圏中心

♣著者紹介

町村 敬志（まちむら　たかし）

1956年北海道生まれ。1984年東京大学大学院社会学研究科博士課程中途退学。現在，一橋大学大学院社会学研究科特任教授（都市社会学）。博士（社会学）。

主著：『「世界都市」東京の構造転換――都市リストラクチュアリングの社会学』東京大学出版会，1994年。『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社，1999年。『都市の社会学――社会がかたちをあらわすとき』（共著）有斐閣，2000年。『社会運動という公共空間――理論と方法のフロンティア』（共編）成文堂，2004年。『市民参加型社会とは――愛知万博計画過程と公共圏の再創造』（共編）有斐閣，2005年。『開発の時間 開発の空間――佐久間ダムと地域社会の半世紀』（編）東京大学出版会，2006年。『開発主義の構造と心性――戦後日本がダムでみた夢と現実』御茶の水書房，2011年。『脱原発をめざす市民活動――3・11社会運動の社会学』（共編）新曜社，2016年。『社会学（新版）』（共著）有斐閣，2019年。

都市に聴け

アーバン・スタディーズから読み解く東京

Back to Voices of the City: Tokyo from the Perspective of Urban Studies

2020年12月25日　初版第1刷発行

著　者　町村敬志

発行者　江草貞治

発行所　株式会社有斐閣

郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町2-17
電話（03）3264-1315〔編集〕
（03）3265-6811〔営業〕
http://www.yuhikaku.co.jp/

組版　田中あゆみ
印刷　株式会社理想社／製本　大口製本印刷株式会社
©2020, Takashi Machimura. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。
ISBN 978-4-641-17452-8

JCOPY 本書の無断複写（コピー）は，著作権法上での例外を除き，禁じられています。複写される場合は，そのつど事前に（一社）出版者著作権管理機構（電話03-5244-5088，FAX03-5244-5089，e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。